

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第8章 祈りについてのキリストの教え④



祈りに向けての道筋を整える



赦しについてのイエスの教えは、山を動かすほどの信仰の教えと密接に結び合わされており、そのような信仰は、願う者が、障害となるあらゆるものから解放されている時にのみ可能であるということを示しています。聞かれる祈りと上から与えられた確信とが、他の人々との正しい関係の上に述べられているのです。イエスの教えによれば、祈りの答えを得たいと願う者は、自分に悪を行なった人々について、そのいかなる人に対しても自らの態度を注意深く吟味しなければなりません。そこで少しでも恨みを抱いていたならば、神の赦しは妨げられ、それは祈りが答えられることの妨げになるというのです。

「また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます」（マルコ 11:25）。

「しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」（マタイ 6:15）。

「また立って祈っているとき、……赦してやりなさい」

———赦しとは、祈ることの一部であるのです。

- 1) 祈りが答えられるかどうかは、神に赦された子どもとしての私たちの態度によって左右され、
- 2) 神の赦しをいただくことは、私たちが他の人々を進んで赦すかどうかにかかっているのです。

時として人間関係が、この世を支配する自己中心的な精神によって粉々に碎かれる時代にあって、これは実に驚くべき（訳注：眠りから覚まされるような）教えではないでしょうか。

あらゆる祈りは、神の赦しの恵みに対する私たちの信仰を基礎とする。神が私たちをその罪に従って取り扱われるなら、どの祈りも聞かれることはない。……人を赦してくださる神のご性質は、私たちに対するその愛に明らかにされており、それは私たちの内なる性質となる。その赦しの力が注ぎ出され、私たちの内に宿るとき、私たちは実に、神がお赦しになるごとく赦す者となるのである。自らの身に著しくも耐えがたい傷や不正義がもたらされるとして、私たちは何よりも、神のような姿勢を持ちたいと願う。それは、名誉が傷つけられたという感覚、自らの権利を守りたいという願い、相手に相応に報いを与えることから守られるためである。日々のささやかな不快なことからも、すぐに怒ったり、きつい言葉を発したり、早急な断罪に走ったりはしないように心がけ、他人に害は与えない、怒りを長くは蓄えない、あるいは、人の弱い性質からあまり多くを期待はしない、神とキリストがお赦しになるように真に赦さなくては、という思いを保つのである。否、私たちは次の命令を文字通りに行うのである。「**キリストがお赦しくださったが如く、汝もまたそのようにせよ**」

私たちに悪を行なった人々については、イエスはさらに踏み込んだことを語っておられます。彼らを赦すだけでなく、彼らのために祈りなさいというのです。「**あなたを侮辱する者のために祈りなさい**」(ルカ 6:28)。マタイはその理由を示します。「**迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです**」(マタイ 5:44-45)。自分に害を与える人々を赦し、そのために祈ることは、イエスの模範に従うことであり (ルカ 23:34 参照)、神の本当の子どもとなることなのです。